正宗白鳥全集

第三卷

小説　三

福武書店

正宗白鳥全集第三巻

一九八三年八月二十日　印刷
一九八三年八月三十日　發行

著者　正宗白鳥
發行者　福武哲彦
發行所　株式会社　福武書店
東京都千代田區麴町六―六
〒一〇二　電話（〇三）二二〇―二二三
振替口座（東京）六―一〇五〇九七
印刷・製本　大日本印刷株式會社
定價　五八〇〇圓
第四回配本（全三十巻）
（落丁・亂丁本はお取り換え致します）

©YUZÔ MASAMUNE 1983
《シリーズコード》ISBN 4-8288-2046-9
ISBN 4-8288-2069-8 C0093

正宗白鳥全集　第三卷

監修　井伏鱒二
　　中村光夫
　　山本健吉
編集　紅野敏郎
　　中島河太郎
装丁　山高登

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三卷　小説三　目次

死後　二
モルヒネ　二七
泥人形　三五
口入宿　六六
『累』　八六
閉店　九五
窒息　一〇〇
窓　一四五

信仰　一五〇
利根川岸より　一六三
雨の日　一六七
のけ者　一七六
喧嘩　一八五
旅の人々　一八九
毒　一九五
草乳香　二八九

都の人　二九四
茶の間　三〇二
平和　三一〇
舊師　三二三
通夜　三二六
河辰の顔　三三七
生靈　三四八
青蛙　四七二

九助の旅　四七七
鞭　四八八
酔漢　五〇五
贋物　五一五
汐風　五三三
解題　中島河太郎　五三七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小說三

死　後

潮は徐ろに滿ちてゐる。涼しい風はそよ〳〵と吹いてゐる。桐の青葉は屋根の上に影を落して、その影はゆらめいてゐる。軒先には二三の蜂が輕く飛んでゐたが、その一つが唸りながら部屋の中へ舞ひ込んで、障子に身を寄せてバサ〳〵と音をさせた。良吉は醒め際の耳にその音を聞き付けて目を醒まして、黄ろい齒を出して大きな欠伸をした。そして暫らく無心に蜂の行衞を追うてゐた。午睡の前に片隅の天神机で手紙を書いてゐた妹の姿は見えず、階下もひつそりしてゐた。

良吉はやう〳〵に身を起して、解けかゝつた絞りの兵兒帶を締め直して植物採集罐を肩に掛けて階下へ下りた。朝の涼しい間にと思つてゐながら、何時も愚圖々々しては、日盛りになつてノコ〳〵出掛けるのである。帽子は被らず、骨張つた黑い素足に小さい藁草履を引掛けて、雜草に蔽はれた小徑を上つた。絶えず右左に目を付けたが、珍しい草花は見つからなかつた。白い花をつけた幽靈草を一つだけ手折つて罐の中へ入れた。そして松の木蔭に腰を卸して豆粒のやうな目を張つて四方を眺めた。山は禿げて所々赤土が崩れてゐる。目の下の寺の庭に杉が一本高く聳えてゐるばかりで、外には高い樹は見えない。樫と松と楓と柿とそして竹藪の外に目に付く樹木はなかつた。作州の北の果て、伯耆境の深出とは比べ者にならなかつた。猿が鳴き鷲が飛び、猪や兎の隱れてゐる山里を思ひ出すと、同じ縣下でかうも異ふ者かと思はれた。で、彼地で習ひ覺えて日日の樂みにしてゐた植物採集も、この故郷ではさして興もないが、日に一度はブリキ罐を肩にして、かうして一人野山を歩かないでは氣が濟まなかつた。

目の下の山の裾には幾列にもなつた石碑が一際鮮明に光つて、白い犬が白い石と石との間を何か嗅ぎながら歩いてゐる。鳶は澄み切つた空に輪を描きながら海の方へ飛んでゐる。良吉は二三度口笛を吹きなどしてゐたが、さも起き上るのが懶いやうにブリキ罐を枕に身を横へて、青空を見

上げた。松の葉越しに光が顔の上にチラついた。
「ほら、良兄さんは此處に居つた。」と、暫らくして聲がして、弟の竹夫と甥の君藏とが側に立つた。「此處に來ることが、私にはちやんと分つとつた。今御飯にするから呼んで來いとお母さんが云ふから、直ぐ此處へ來たんぢや。」と、竹夫は自慢さうに云つた。君藏は叔父を見つけたので、悅しさうにその裾にまつはり付いた。
「まだ飯は欲しうないがなあ。」と、良吉は大儀さうに云ひながら、ブリキの罐を肩にかけて、一緒にのろ〳〵山を下りた。君藏は後ろからその罐を打ち鳴らしながら、「何が入つてるの。」と繰り返し〳〵訊いた。
「この中には化物が入つてる。」と、良吉は笑ひながら云つた。
「化物が入つとるんかな。開けて見せとくれよ。」と、君藏は片手を罐に掛けた。
「開けると怖いから開けられん。出られんやうに、ちやんとこの中へ封じて入れとるんだから。」
「見せとくれよ。怖くてもえゝから。よう、叔父さん。」
「開けると、君藏なんか一攫みに攫まれて、山の奥へ連れ行かれるぜ。作州の山の中で子供を浚つて仕方がなかつたのを、叔父さんが攫へてこの中へ入れたんぢや。」
「そいでどんな顔をしとるの。開けて見せとくれよ。」君藏は首を傾けて罐のまはりを見詰めた。
「盆が來たら見せてやらう。精靈樣と一緒に海へ流すんだから。」

晝餐の濟んだ頃、八角時計は二時を打つた。良吉は皆んなに遲れて箸を置いて、膨れた腹をさすり〳〵二階へ上つた。妹のお作の鳴らしてゐる手風琴の音を聞きながら、又も眠氣さしてゐたが、ふと階子段の下から父の呼ぶ聲が聞えた。「良」「良」と二度三度太い聲がした。良吉は妹に注意されながらも返事をしなかつたが、それでも不承々々に階下へ下りた。父は風通しのよい階子段の側に胡坐を掻いて厚い唇を反らして煙草を吸つてゐる。
「まあ其處へ坐れ。」と、突立つた良吉を見上げながら、頤で差圖した。良吉は默つて其處に畏つた。膝頭がよく隱れてはゐなかつた。
「それでお前はよう考へたかい。どうしようと思ふ。」と、父は力を入れて訊いた。
「私はどうでもえゝ。」
「どうでもえゝぢや困る。お前ももう二十四だから、何とか先々の量見を極めにやならん。何時までも十二三圓の月

給取りでは仕方がないぢやないか。教師なら教師で、正教員の資格を取るとか何とかしなくちや。」

「さう思ふこともあるけれど、とても正教員の試驗を受けられませんから。何度試驗を受けても合格せんに極つとるから、受けるだけ損だと思ひます。」

「そんな意氣地のないことでどうする。勉强すりや、高が小學校の正教員の試驗ぐらゐに及第せん譯はない。濱田の種さんはお前より後で學校を出たのに一年岡山で勉强しただけで、立派に合格して二十圓から月給を取つとる。それにお前は師範でも一年關西中學で二年、三年の餘も學問しといて、何時も人に負けとつちや恥しいぢやないか。」

父は落着いた聲でさう云ひながら、短い眉を顰めて良吉の顏を見詰めた。そして、心に適ふやうな返事を望んでゐたが、良吉は目を下に向けて默つてゐた。二階からは手風琴の音につれて、「靑葉繁れる」の唄が涼しい風に送られて柔かに聞えて來た。

「何とか返事をせい。」と、父は手强く云つて、「教師が厭なら厭で、自分の望みの仕事もあるだらう。實は此間も郵便局の坂谷が止めるから、此家で引き次いでやつて呉れんかと云ふ話もあつたんぢや。お前がやる氣ならその方の話をつけてもえゝ。家に居れば食費も入らんし、仕事の傍ら家の手助けも出來るんぢやから、作州の山奥に居るよりや何かと都合がえゝと思ふ。」

「郵便局なんか面倒臭いから、私には不適當でせう。」

良吉は顏を上げてさう云つてケロリとしてゐた。心は手風琴の音に惹かれて、半ば夢心地になつた。そして父の平たい顏は煩はしく夢を亂した。

「面倒臭いからちうて、人間は何もせいで居られるものぢやない。お前のやうな才のない者は初めから百姓にでもなればよかつたんぢやが、今更それも出來まいから、手足を働かさん仕事で、それ相應に先の當ての付く事を考へにやならん。」

「ヴアイオリンでも習ひたいと思ふんだけど。岡山では人に借りて稽古した事もあるんだけど、樂器が高いから買ふとは思つても買へません。」

父は煙管を震はせた。わが子の意外な不量見な言葉を憤つたが、口に出して罵るにも張り合ひのないやうな氣がして、「まあよう考へて見い。休暇が濟むまでに何とか極りをつければえゝから。」と云つて、煙管を投げ出して立ち上つて、小庭の方へ行つた。

良吉はやう〳〵息を吹き返して、二階へ上つた。手欄に身を寄せて、「もつと彈いて見んか。」と、妹を促した、

が、妹は「いや〳〵。」と首を振つた。
「おれが歌ふから彈けいよ。」
「だつて、もう彈きたうないもの。」
「ぢや、おれが彈くから、お前が歌うて見い。」
「あかんべ〳〵。」と、妹は指先で目を裏返して、手風琴を抱へて急いで階下へ下りた。
良吉はニヤリと笑つて、「お轉婆だなあ。」と獨り言を云つた。そして足拍子を取りながら、小聲で、「春高樓の花の宴、めぐる盃影さして……。」と唄ひ出した。顏に似合ず唄の聲は可愛らしかつた。「故郷の空」や「夕風吹きて」を續けて唄つてゐたが、何時か心が唄から離れて、父の言葉が氣になり出した。歸省しなければよかつたけれど、かうして家へ歸つてゐれば、毎日々々父から將來の事を詰問されるに違ひない。去年は曖昧にしといて逃げたけれど、今年はさうはなるまい。休暇中に自分の身の處置を煩く極められるに極つてゐる。それが厭だ。山奥の小さい分教場で教師をしてゐれば、誰も傍から苦情を云ふ者もないし、一人暮しには不自由はしない。それで自分は滿足してゐるのに、父や兄が睡い者を搖り起すやうに餘計な小言を云ひたがつて仕方がない。
「あゝ煩い。」と、良吉は心の中で叫んで、暫らく屈托してゐた。
直ぐ右手の白壁の穀物倉の軒には雀が巢を組んでゐて、今親鳥が子鳥に餌を食ませてゐる。子鳥が忙しく鳴いてゐる。良吉の目はふとその方へ向つた。
夕凪で晝間よりも二階は暑苦しかつた。潮は岸を離れて、黑い潟があらはれた。蚊遣りの煙は階下から舞ひ上つた。風呂へ呼び下ろされて、良吉は烏の行水の樣に身體を濕らせたばかりで出た。父は顏に汗を浮かせながら釜の下を焚いてゐる。母はバタ〳〵動いてる魚の頭を壓へてその鱗を剝いでゐる。燻つた軒先には蚊柱が立つてゐる。良吉は濡れた踵に土のつくのも構はず、弟の草履を穿いて菜園の方へ行つた。そして、茄子と胡瓜とを手切つて、爪先でそれを搓りなどして、夕食時を待つてゐた。
夕飯の座は一日中で殊に賑やかで、長兄の退一、東京から歸つた慶作、それに良吉と竹夫と、今年女學校へ入つたお作と、五人の兄弟も皆んな揃つて、十人からの家族が釣ランプの下に居並んだ。良吉は一座の中で一番言葉少なで專念に食事を取つた。食事が濟むと、慶作も竹夫もお作も、何時ものやうに隣りに別居してゐる長兄の家へ行つた。その北向きの四疊半へは山から涼しい風を吹き下ろし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com